校長室から　令和２年５月２２日

分散登校、そして６月１日から学校再開です

保護者の皆様へ

約３ヶ月の休校期間が終了します。当初、仙台市では春休み終了後の学校再開を目指していましたが、感染者が散見されるようになり、休校期間を１週間延長して、４月１５日始業式、１６日入学式に変更としました。その後、さらに感染者が増え、５月６日のゴールデンウィーク明けまで休校期間が延長、その後も、状況は好転せず、さらに５月末日まで休校期間が延長されました。この間、３月に２度、４月は教科書配付日に１度、そして５月は昨日の教材配付日と来週の２回を分散登校日とさせていただきました。そして６月１日(月)、いよいよ学校再開となります。(このままの状態で感染が落ち着いていてほしいと願うばかりです。)

この長期間、保護者の方々には大変なご苦労をお掛けいたしました。この長町小中学区の住民の方々の中には、医療関係で命がけの職務を遂行されている方々、他県を往復しながら職務している方々、感染する不安やリスクを間近に感じながら職務している方々が多くいらっしゃる事と思います。そして、本校のすべての保護者の皆様が、不安や恐怖を感じながらも仕事を終えてご自宅に戻れば、お子様の休校に対応しなくてはならず、大変な毎日が続いていると思います。

そして生徒達に対しては、とてもつらい思いや我慢を強いてしまう事になってしまいました。この３ヶ月、「～の中止」「～の延期」等、生徒にとって目指す目標や楽しみにしていたイベントや行事等が次々になくなってしまい、突然の「９月入学への変更か」等の報道で、今も不安な日々が続いていることでしょう。

それでも長町中学校の生徒だけではなく、他の中学校の生徒達、高校生、そして大学生も地域の方々の迷惑にならないようにと、場所を変え、時間を工夫し、周囲に気を配りながら、学ぶ機会を手探りで探したり、身体を鍛えたり、トレーニングしていたり、必死に自分のできる範囲の中で、やるべき事をやろうと努力していたと思います。そのような長中生の姿も実際に何度も見ました。「どうして自宅にいないのか」とお叱りを受けた事も各学校であったようです。しかし、一方で「開けているから当然いくでしょう。」「ストレスが溜まるから」等の理由で娯楽場に列をなしている大人達の姿を報道で見るにつけ、子供は頑張ろうとしているのに・・と、やりきれない気持ちも感じました。しかし、営業する方々からすると、企業存続の死活問題でもあり、私の感情とは次元が異なる事も理解はしていました。

この３ヶ月の休校期間に、緊急事態宣言が日本で初めて発出されました。私は、この言葉を聞くたび、そして使われる度に「緊急事態宣言とは何だろう。」と毎日、考えました。「緊急事態とはなんだ・・。」　毎日、校舎や校庭を巡回しながら考え続けました。学校内の教室も廊下も校庭も体育館も毎日無人でした。長い教職人生の中でこんなに生徒達が学校に登校していない日々はありませんでした。最初は「生徒がいない学校は寂しい。早く戻ってきてほしい。」という気持ちでしたが、それだけではなくなりました。

「生徒がいない学校とは何だろう。どうして生徒達は学校に登校しないのだろう。」それはいくら考えても整理できませんでしたが、自分なりに考え続けました。「登校する事によって、人との接触が多くなり、感染リスクが高まり、自身も周囲も命が奪われてしまう危険性がある。だから生徒はいないのだ。学校に対しての緊急事態宣言とはそのような事なのだ。」分かりきっているようで、なかなか気持ちの整理が進みませんでしたが、同時に「私のするべき事は何だろう。」

と考えました。４月、仙台市で感染者が増え始めてきた時、自分なりに考えがまとまりました。「感染のリスクを少しでも回避し、学校に生徒を登校させない事、生徒の命と保護者の方々の命が守られる事、教職員の命が守られる事、みんな無事で学校に戻ってくる事」これがすべてと思いました。

４月１６日の教科書配付の日、下校する生徒を見守っていた際、私に「校長先生もお身体気を付けていて下さい。」と声を掛けてくれた３年生の女子生徒がいました。その優しい言葉が心に響きました。「そう、生徒も保護者の方々も教職員も教職員の家族も命がある事、それが一番大切な事」と、教えられました。

今のこの状況を一番身近にいる本校の職場に当てはめて考えてみました。保護者の方々と同じように、一人一人に家庭があり、これからも生きていく理由があり、意味があります。もうすぐ新しい命が誕生しようとしている教職員、家族に新しい命が誕生しようとしている教職員、生まれたばかりのお子様を大切に育てている教職員、親の介護が必要な教職員、一番大切に思っている家族の一人が重い病気で繊細な配慮が必要な教職員、基礎疾患がある教職員、遠く離れた場所で医療に従事しているご家族を心配している教職員、高齢のご両親と同居している教職員、職業人ではありますが、そこには、一人一人の大切な家庭があり、歴史がある事は、保護者の方々の御家庭と同じだと思いました。保護者、教職員、生徒、立場はそれぞれ異なりますが、大切な家庭があるという事を忘れてはいけないと思いました。

私達に今必要な事は、「生徒の命があって、元通りに学校に戻ってきてくれる事」そして「生徒達や保護者の方々、私達、様々な立場の人が不安や恐怖に耐えて様々な苦労をしている」という事を想像する力を高めていく事かなと思いました。決して、感染者を悪人扱いしたり、人を傷つけたり、罵倒しあう事であってはいけないと思います。想像力をはたらかせ、互いに思いやる心が必要だと、女子生徒の優しく思いやりのある言葉から学びました。

「学校のパソコン室の開放を」という通知もありました。また、「生徒の家庭に短時間でも訪問して顔を見て、言葉を掛けてプリント等を配付して・・」という通知もありました。(これは、各学校の実情に応じてというものでしたが・・。)

しかし、私は「生徒が休んでいる理由は何だろう。」と何度も考えました。家庭訪問した場合、８００名以上の御家庭に訪問する事になります。もし無症状の教員、無症状の生徒達がいた場合、どのように感染が広まっていくのだろう、学校のパソコン室を開放して、もし生徒が感染を広めてしまったら、健康状態と同じように、心も深く傷ついて、学校生活が送れなくなるのではないだろうかと考え、悩みました。結局は、私の方針で、「学校に近づけない事、人との接触はなるべくさせない事」という判断をさせていただき、教職員全員で共通理解いたしました。家庭訪問を望んでいた生徒や保護者の方々もいらっしゃった事と思います。大変申し訳なく思っております。今も何が正解なのか考え続けています。

しかし、昨日、生徒達は時間を守り、登校してくれました。やはり長い期間の休校で、少し元気のない生徒もいたように感じます。それでも「勉強していました。」「身体も鍛えていました。」と明るく話してくれた生徒も多くいて、少しだけ安心しました。

来週の分散登校で、今年度初めて校舎内に生徒達を入れます。教職員全員で分散登校の対策を何度も考えました。私達教職員もどこに気配りをしたらよいのか再評価しながら、６月１日を迎えたいと思います。長町中学校用の新型コロナ対応マニュアルも作成しました。来週の登校日には生徒に配付いたします。保護者の皆様の中で専門的な知識をお持ちの方は、ご助言いただけると有り難いです。長町中学校の素晴らしき生徒達と、また一緒に学校生活を送っていける事を楽しみにしております。　今度こそ、今度こそ学校が無事再開できますように・・。